在外教育施設における日本文化・伝統教育の重要性

前釜山日本人学校　教諭
長野県飯田市立伊賀良小学校　教諭　原　　朋　子

キーワード：在外教育施設、釜山、日本文化・伝統教育、図書教育、国語科

１．釜山日本人学校概要

釜山は、韓国南東部に位置する、韓国第２の都市である。古くから港町として発展しており、釜山港は韓国最大の規模と貨物取扱量を誇る港湾である。また、海沿いには海水浴場が点在しており、夏になると国内外から多くの観光客が訪れる観光地でもある。その観光地の１つ、広安里（カンアンリ）ビーチから歩いて５分もかからないところに釜山日本人学校はある。３階建ての小さな校舎と小さなグラウンドがあり、およそ30名程度の小・中学生が学んでいる。小規模の学校ならではの手厚い個別指導ができること、子ども一人ひとりの活躍できる機会が多いことが魅力のアットホームな雰囲気の学校である。

２．課題意識

日本人学校に赴任してまず感じたことは、「外国にある日本人学校として現地の文化や言語を学ぶことも大切だが、自国の文化や言語に誇りを持ち、他国の人々に正しく紹介できる力も重要だ」ということである。なぜならば、現地校やインターナショナルスクールとの交流会で日本文化を伝える機会があったり、様々な行事においてふるさとの合唱や太鼓やソーラン節といった日本らしい発表を求められたりする機会がとても多いからだ。

国際人となっていくであろう日本人学校の子どもたちは自国の文化や伝統を他国の人々に自信を持って伝えられるようになってほしいという願いを持った。それができてこそ、お互いの国の文化や伝統、言語の共通点や相違点を見いだし、お互いを尊重し合うことができるのだと思う。

そこで、自分は、国語科として日本語を正しく教えることはもちろん、日本の文化や伝統を意識して日々の生活や学習を行うことにした。

３．学校や自分自身の実践

(1) 日本の年中行事を大切に

釜山日本人学校では、これまでも日本の年中行事を大切にしてきた様子がうかがえた。５月にはこいのぼりを上げ、７月には笹に短冊を飾り、１月には餅つきをし、３月にはひな人形を飾っていた。赴任当初は日本の学校よりも日本らしいと感じた。しかしよく考えると、日本にいれば、メディアや町の景色から年中行事を身近に感じることもできるが、韓国ではそのような機会が少ない。日本人学校は日本の四季の移り変わりも子どもたちに体験させなければならないのだと、日本人学校に課された責任の重さを感じた。

年中行事の飾りは高学年や中学生が準備してくれることが多かったので、低学年も自分の体験として残るように、図工の時間を活用することにした。５月のこいのぼりを上げる時期には、子どもたち自身でこいのぼりとかぶとを作った。７月の七夕の時期には、全校の皆が短冊をかける笹に七夕飾りを作って、にぎやかに飾った。また、２月の節分の際には、鬼のお面を作って、豆まきをした。

(2) 図書教育の充実

日本人学校に勤務し、学校図書館に課せられた役割の重さも実感した。外国での生活では、日本の本を買ったり、借りたりできる場所が限られている。その中で、日本人学校の図書館は子どもたちにとって気軽に日本の本を手に取ることができる場所である。海外生活で日本語に触れる機会の少ない子どもたちが日本語を学び、日本

語に親しむことができる貴重な場所であると感じた。そのような考えのもと、国語科として、また図書教育担当として学校図書館の充実を図ってきた。

まずは、古い本の処分から始めることとなった。30年以上前に購入された本やぼろぼろになった本が多くあったからである。貴重な本だとは思うが、現代の子どもたちの実態に即していない本が多く所蔵されていた。子どもたちが手に取っている様子もないので、処分することに決めた。ただ、外国では貴重な日本の本であるので、領事館の図書室への寄贈、学校バザーへの出品も行い、多くの方々に手に取ってもらえるようにした。

次は、新しい本の購入である。教科書に載っている本や日本で話題となっている本、子どもたちに人気の本を中心に購入することにした。購入に当たっては、子どもたちや職員に図書室に入れて欲しい本のアンケートもとり、参考とした。子どもたちは自分の読みたい本が図書室に入ったことで、以前より図書室に通うようになった。

そして、授業で図書室を活用することを心がけた。調べ学習はもちろんのこと、国語の授業でポップ作りを行い、実際に子どもたちが作ったポップを図書室に貼ったり、意図的に図書室で授業を行い、いろんな本に触れさせたりした。

また、釜山日本人学校では、有志の保護者が「読み聞かせの会」を組織し、月に2回小学部の児童を対象に、読み聞かせを行ってくれる機会がある。これも、子どもたちにとって本に触れる良い機会となっている。日本の年中行事・学校行事や季節に合わせた絵本、日本の伝統を伝えるような本を主に学校図書室から探して読んでくれた。子どもたちは興味を持つと、読み聞かせで読んでくれた本を自分で借りて読んだり、関係する本を探して読んだりしていた。

(3) 授業を通して

授業でも日本の文化や伝統を意識してきた。特に授業に取り入れたのが、百人一首である。百人一首は日本独自のリズム5音、7音をゲーム感覚で身につけることができ、また古典独特の言い回しにも慣れることができる日本の伝統だと考える。

国語の教科書に百人一首が出てくるのは小学校4年生だが、小学校1年生のクラスでも百人一首に触れさせてみた。まずは、カルタとしてではなく、坊主めくりなどのカードゲームとして遊び始めた。百人一首の札に親しめるようになってきたら、五色百人一首を使って20枚ずつでカルタを行った。最初は、取り札には下の句しか書いていないことや現在では使わない言葉に戸惑っていた子どもたちも慣れてくると、札をたくさん取るためには上の句を覚えていた方が良いと気づき、自分でノートに書いて覚えたり、家でも練習したりするようになっていた。最後には、上の句を聴いただけで自分の得意札を取れるようになった。そして、難しい百人一首ができるのは、子どもたちにとって大きな自信になったようである。

高学年・中学生は、源平戦を行ったり、歌の意味を調べたりするなど、本格的に取り組んだ。中学生は百人一首に取り組んでいることで、古典の歴史的仮名遣いの読み方や和歌の学習に抵抗なく進んでいける印象を受けた。

また、国語だけでなく、中学部の家庭科の授業でも日本の文化を取り入れた学習を行った。被服の分野では、浴衣を実際に着てみることにした。子どもたちは何度か着たことはあるが、自分で着るのは初めてだったようで苦労していた。私自身も浴衣を着ることなどほとんどなかったので、日本でもっと学んでおけば良かったと思うほどであった。食物の分野では、日本各地の伝統食や行事食を調べた。日本各地から集まってきている子どもたちなので、ご当地の話や行事の時に食べる食べ物の違いで盛り上がった。日本人学校ならではの学習ができた。

4．まとめ

このように、日々の生活や授業の中で、日本文化や伝統、そして日本語に親しめる機会を意識的に設けてきた。これらの実践が外国で暮らす子どもたちの生活体験を少しでも豊かにすることができていたら幸いである。子どもたちが将来、世界を股に掛けて活躍する人になった時、日本人学校でこんなことをしたな、と振り返り、日本のことを魅力的に紹介できるようになってほしいと願っている。

また、自分自身も日本の文化や伝統についてまだまだ知らなかったり、曖昧な知識であったりすることが多いことに気がついた。特に、遊びに関しては子どもたちの方が詳しく、あやとりや折り紙は子どもたちから習うことが多かった。自分自身もさらに日本の伝統や文化について知識や見聞を広げていかなければならないと感じた。

韓国で暮らし、釜山日本人学校で学んだ3年間は非常に貴重で有意義な時間であった。この貴重な3年間で体験したことや感じたことを、今、日本の子どもたちに伝えている。そして、子どもたちが自国と他国の「ちがい」に触れ、それを認め、受け入れる心を育んでいけるような国際教育を進めていきたいと考えている。